

## 【砂漠での小便・・・】

いよいよ今年も年の瀬、師走を迎えました。皆さんにおかれましては、どの様な2002年を過ごすことが出来ましたか？満足のいく時間を過ごせた事と拝察致します。

さてこの1年間を振り返りまして、我が日本国におきましても本間に色々なことがありました。現在の日本は「不安な時代」に象徴される様に、確かに色々な不安の種があります。

不良債権で金融システムが崩壊しそうです。景気はサッパリ上向かなくて、いつリストラされるかわからない。北朝鮮の拉致問題や工作船がクローズアップされて何やら不気味だし、ちよつとお隣に目を転じると中国経済がやたら元気で日本が追い抜かれるのは目に見える感じです。はるか海の向こうの方では、イスラエルとパレスチナが相変わらずドンパチやっついて収まりがつきそうもないし、アメリカはイラクをやっつけるといきり立っていて、日本にどんな影響がくるか分かったものではありません。

ません。こうやって世の中に目を向けてみると、確かなものは1つもなく、何となく不安にさせる要因がゴロゴロしています。

そこで私達国民が幸せに生きるために必要なのは、現在の様な場当たりの外交や、内政から訣別し、一貫性のある国の信仰なのです。国権思想です。国民の生活の信仰や哲学と、国家の信仰や哲学とは、実は深いところで繋がっているのです。

信仰は宙に浮いたものではありません。それは生活習慣といった最も基底となる日常生活での文化に具体的に表現されるものです。日常生活における信仰にもつと意識的になる。それが何とはない不安感を払拭し、幸せに生きることにつながるっていくことでしよう。ここで皆さんに、私が学生時代に体験した逸話を一つご紹介致します。

私が大学3年生の時ですが、中国へ行き三蔵法師が旅したというシルクロード横断の旅に出掛けました。その工程で、タクラマカン砂漠を通過したのですが、太陽が沈み、満天の星空の下、野営地

を組んで、だだっ広い砂漠の中で寝袋に入って夜を越す事になりました。カンカン照りで肌が焼けるように暑い昼間と違い、太陽が沈んだ砂漠の夜はとても肌寒く、ふと小便がしたくなって目が覚めました。

砂漠には勿論トイレなんてものはありません。大も小も全て自然の中で用を足すものなのです。

そんな中、私は寝袋から起き出してすぐ近くで小便をするのは、他の人の手前はばかれるから、少し離れた所で用を足そうと、懐中電灯を片手に少し歩いて行って、小便を済ませました。さて、寝袋に戻ろうと歩き出したんですが、寝袋に戻れなくなってしまいました。

というのも、街頭や目印になるモノが何もない、のっぺらぼうの砂漠では、方向感覚や距離感覚が全く掴めなくなってしまうのです。

(焦)。あてどもなく暫く歩き回って探したのですが、見当たらない。あんまり歩き回って仲間達と離れてしまえば、それこそ元も子もないので、仕方がなくその場所で朝日が昇るのを待つことにしました。

程なくして大きな太陽が顔を出しました。その瞬間、「何で！どうしてこんなに離れてしまったの！」と、思わず叫んでいました。

私がいたその場所から、野営地が約200メートル離れた場所に見えたからです。

私は、走って野営地に戻り、中国人のガイドの方に、小便の一件を話すと、ガイドさんがこう言いました。

「砂漠では目印になる物が何も無いから、もし野営地を離れる時は、懐中電灯を持っていくのではなく、懐中電灯の明かりを点けて、それを寝袋のところに置いておくことが大事なのです。そして、その明かりを見失わないように離れれば、簡単に元の場所に戻ることが出来るでしょう」と。「なるほど」と、私は深くうなずきました。これは、私達の生活全てに当てはまる事ではないでしょうか？

また、「信仰」というのも、この懐中電灯に譬える事が出来ましよう。つまり、懐中電灯を点け、寝袋のところに置いて離れるには、そのことに意識的にならなければいけません。」

そこで私達は毎日の生活の中には、必ず意識的にならなければならぬ。そういう時に自分に直面します。そういう時に自分の信仰がシッカリしていれば、私達の人生において信仰という光が、人生を歩く道標になり、道に迷えば、その信仰の光が的確に正しい方向を示してくれるという事になるのではないのでしょうか？

信仰とは、例えれば南十字星の様なものです。南十字星さえ見失わなければ、羅針盤が無くても船乗りは航路を誤ることはないのです。信仰心は人生の行路を正しく示してくれるものと思います。

最後になりましたが今年も一年間、仏様・日蓮大聖人をはじめ、檀家信徒の皆様を支えられて、何とか無事過ごす事が出来ました。心から御礼の言葉を申し上げまして、今年最後のメッセージとさせていただきます。『本当に有難う御座いました！南無妙法蓮華経』

合掌 副住職 谷川寛敬

副